

佛乗寺檀信徒の皆さま

日蓮正宗 佛乗寺 住 職 笠原建道
講 頭 廣田正至

《早起きは三文の徳 朝参りは三世の徳》

よく知られたことわざに、「早起きは三文の徳（得）」があります。古い話で恐縮ですが、テレビの時代劇に、「銭形平次捕物帖」というものがありました。その中で、銭形平次が、下手人に向かって投げるのが「一文銭」です。江戸時代の一文を現在の貨幣価値に換算すると三十円位だそうですから、ことわざにある「三文」は約九十円位になります。そこから、三文は、「ほんの少し・ごくわずか」という意味で用いられ、「早起きは三文の徳」は、早起きすることによってわずかでも徳（得）になる、と朝寝坊を誡める上から使われました。

一方、日蓮正宗では、「朝参りは三世の徳」と古来より言い慣わされてきました。朝の勤行に、お寺まで足を運ぶことで、三世に亘る功德を受けられるのですから、御本尊様の功德がいかに偉大であるかがわかります。この言葉にも、私たちの信仰が、今日だけ、目の前だけを見てするものではなく、過去世・現世・未来世を見つめたものであることがわかります。同じ「早起き」でも、天地雲泥の差があります。

さて、檀信徒の皆さまは、一日の始まりにあたって執り行う「朝の勤行」で何を思われるでしょうか。今日も無事に過ごすことができますように、と願い、今日も御本尊様のお使いをしまいに、と決意をする両方の意味が勤行にはあります。

このように思って、勤行をすることによって、漫然と一日を出発する生活から、目標をもった一日の出発となります。何ごとにおいても、明確な目標を掲げることは大切であり、そのことで日々の生活にリズムが生まれ、リズムのある生活には大きな結果がついてまいります。

目標といい、決意といっても、大きなものである必要はありません。会社の同僚と笑顔で挨拶ができるように、という目標。「今日お寺にお参りしてから出勤したの」と御本尊様のことを、ほんの少しでも伝えよう、との決意。ハードルを高くするよりも、低いハードルでよいのです。続けることが大切です。小さな持続が、大きな成果となることは、仏法でも世間法でも変わるところはありません。

夜の勤行では、一日の無事を感謝し、明日も元気に活動ができるように、と願います。さらには、今日はこのような日であった、と一日を振り返り、良かったこと、そうではなかったことを思う時間です。朝の勤行のうちに、御本尊様をお願いしたこと、「笑顔で挨拶」ができたか、「御本尊様のことを伝える」

との決意を実行できたか、を思う時です。できていれば、御本尊様が、「良い一日でしたね。明日もきっと良い一日になります。おやすみなさい」とニコリと微笑んで下さるでしょう。不本意な一日であれば「今日はできませんでしたね。でも明日はできます。諦めないで取り組むことがなによりも貴いのです。絶え間なく流れる川の水のように、私たちの心も、流れる水のようにあれば、心配はありません。三世を切り開くことは、時間のかかることなのです」と、ニコリと微笑んで下さいます。

冬の朝はまだ暗い中で初座がはじまります。途中から、次第に明るくなってきて、やがて太陽の光が差し込んでまいりますと、本堂内が明るく照らし出されます。この時に、太陽の力、光りの有り難さを強く感じると共に、なんともいえない感謝の念が湧き上がってまいります。日蓮大聖人様が、

「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能

く衆生の闇を滅す」(『寂日房御書』御書・一三九三頁)

と法華經の神力品を引用して御教示下さるように、私たちの生命の奥底にある闇を、御本尊様の功德の光りが照らしだし、明るく光り輝くようにして下さっている、と実感する瞬間です。

暗いことを知っている者のみが、光りの有り難さを知ることができます。同じように、悩みや苦しみがある者のみが、楽しみや喜びを感じることができます。暗いことを知らない者には、光りの有り難さは分かりません。このことは、御宝前のお灯明だけで朝の勤行をすると実感できることです。このように思えることも、勤行の功德であると私は確信しております。

檀信徒の皆さまにも、多くの功德を受けて頂きたいと願う上から、朝の勤行に参詣されることをお勧めいたします。

しかしながら、何ごとにおいてもルールがあるように、勤行においても同様です。以下に何点か述べますので、心懸けでいただきたいと思います。

何故この様なことを申し上げるかと言えば、総本山や他のお寺にお参りした時も同じだからです。総本山では、「佛乗寺の信徒」と分かれば、それは佛乗寺全体のことになります。ルールを守れない非常識な一人のために、他の佛乗寺檀信徒が同じように思われるのは困ります。常識的な振る舞いで、佛乗寺の檀信徒はさすがですね、といわれるように、皆で戒めあってまいりたいものです。

お経がはじまって後に本堂に入る場合には、静かに入り後方にお座り下さい。また、時間の都合で先に帰る方は、はじめから後ろにお座り下さい。常識的なことですが、あえてここに記すのは、ごく一部、ごくごく一部ですが、常識が通じない者がおります。

勤行の初座に間に合わない時に、本堂に入るのではなく、ホールで静かにお待ちになっている方がいらっしゃいます。とても謙虚なご信心だと思えます。皆さんの勤行を妨害しないように、という配慮がその姿に現れており、貴く存じます。このような場合には、前述したように、外でお待ち頂かなくとも、静

かにお入りいただいて結構です。

また、御経日に、ある方が後ろの方にお座りになっておりましたので、「前にどうぞ」と申し上げますと「申し訳ありませんが、時間の都合で、お説法の最後までいることができません。途中で帰ることになりますので」との御返事がありました。まことに常識的な振る舞いです。

さらに、お経や唱題は導師にはもちろんですが、周りの方々とあわせるように心がけることもたいせつです。

次のような者もあります。我流で、テンポも発声もずれたお経や唱題でしたので、「貴男のお経や御題目はズレています。他の方々の迷惑にもなりますのでよく聞いてあわせるようにして下さい」と申し上げたところ、「それは住職と私の主観の相違です」という言葉が返ってきました。これはよく考えなければなりません。勤行や唱題の時、二人以上でする時には、導師にあわせることが肝要です。お経が合わないのは、導師との主観と違う、という次元の話ではありません。導師に、マイク係の僧侶に、周りの方々にあせることを心がけることが基本中の基本です。これは、主観の相違ではなく、「異体同心」の成仏か、「獅子身虫」の墮獄かの違いです。導師に合わせ、周りの人たちにあわせて勤行・唱題するのは、「異体同心」を実践する修行であることを忘れてはなりません。

自己中身の心を改めて、御本尊様の御心を我が心に、と励み、「異体同心」を目指しましょう。

新緑と爽やかな風に、命が洗われるように思います。その上に、唱題を重ねれば、なお清浄な命になれます。御法主日如上人の御指南を心に留め、爽やかな活動に励みましょう。